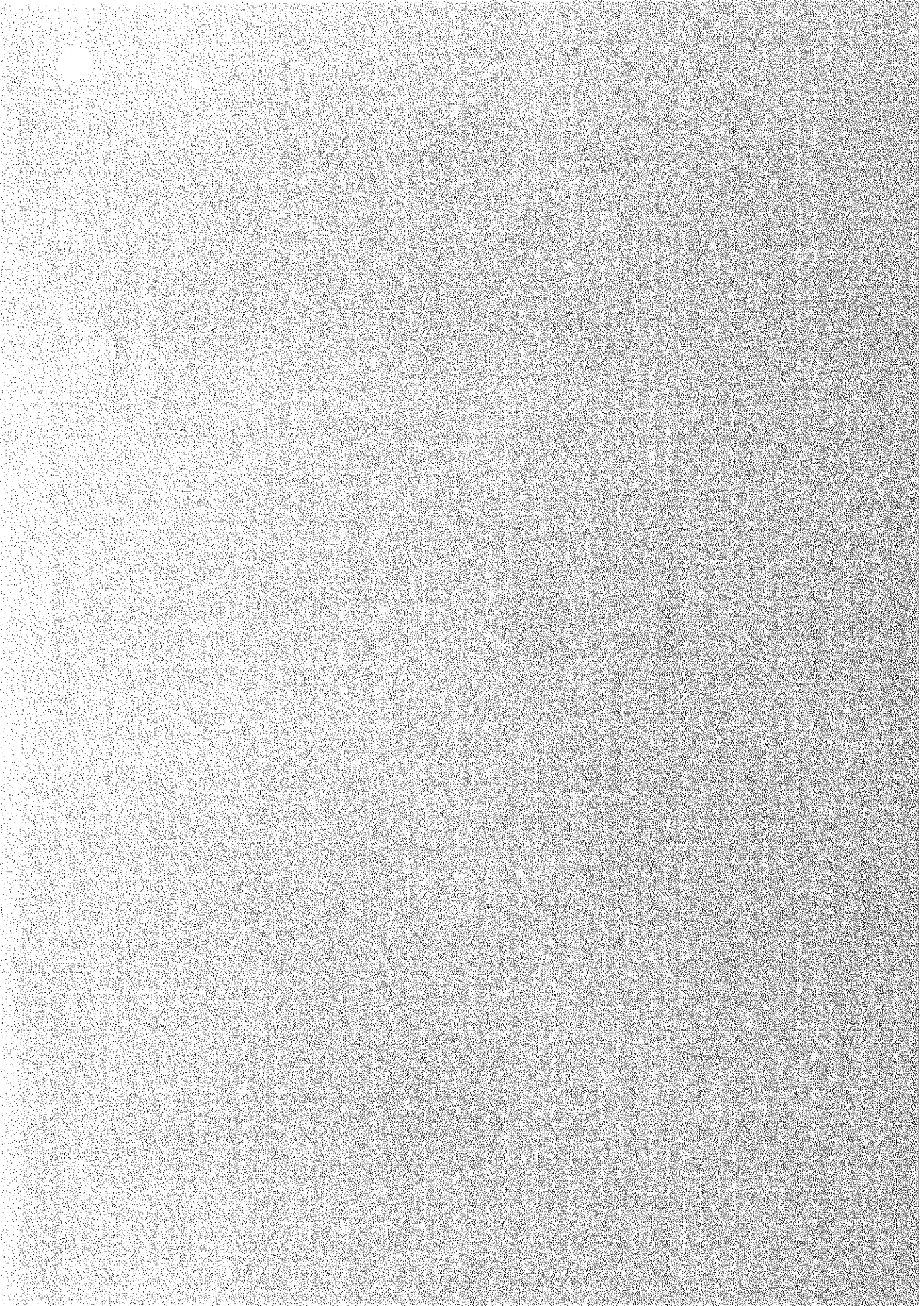


2018年度入学試験問題

国語

(試験時間 15:00～16:00 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。



— 1 —
— 2 —
— 3 —
— 4 —
— 5 —
— 6 —
— 7 —
— 8 —
— 9 —
— 10 —
— 11 —
— 12 —
— 13 —
— 14 —
— 15 —
— 16 —
— 17 —
— 18 —
— 19 —
— 20 —
— 21 —
— 22 —
— 23 —
— 24 —
— 25 —
— 26 —
— 27 —
— 28 —
— 29 —
— 30 —
— 31 —
— 32 —
— 33 —
— 34 —
— 35 —
— 36 —
— 37 —
— 38 —
— 39 —
— 40 —
— 41 —
— 42 —
— 43 —
— 44 —
— 45 —
— 46 —
— 47 —
— 48 —
— 49 —
— 50 —
— 51 —
— 52 —
— 53 —
— 54 —
— 55 —
— 56 —
— 57 —
— 58 —
— 59 —
— 60 —
— 61 —
— 62 —
— 63 —
— 64 —
— 65 —
— 66 —
— 67 —
— 68 —
— 69 —
— 70 —
— 71 —
— 72 —
— 73 —
— 74 —
— 75 —
— 76 —
— 77 —
— 78 —
— 79 —
— 80 —
— 81 —
— 82 —
— 83 —
— 84 —
— 85 —
— 86 —
— 87 —
— 88 —
— 89 —
— 90 —
— 91 —
— 92 —
— 93 —
— 94 —
— 95 —
— 96 —
— 97 —
— 98 —
— 99 —
— 100 —

— 1 —
— 2 —
— 3 —
— 4 —
— 5 —
— 6 —
— 7 —
— 8 —
— 9 —
— 10 —
— 11 —
— 12 —
— 13 —
— 14 —
— 15 —
— 16 —
— 17 —
— 18 —
— 19 —
— 20 —
— 21 —
— 22 —
— 23 —
— 24 —
— 25 —
— 26 —
— 27 —
— 28 —
— 29 —
— 30 —
— 31 —
— 32 —
— 33 —
— 34 —
— 35 —
— 36 —
— 37 —
— 38 —
— 39 —
— 40 —
— 41 —
— 42 —
— 43 —
— 44 —
— 45 —
— 46 —
— 47 —
— 48 —
— 49 —
— 50 —

あなたを幸福にしないもの。それはハラスメントである。ハラスメントは、あなたの魂を呪縛にかける。呪縛された魂は、自由に動くことができない。というより、自ら、自由に動くことを恐れ、拒絶してしまう。そのときあなたの魂は、縮こまり、怯え、青ざめる。そしてあなたを呪縛するものが存在しないかのように振る舞い、目の前にある悪意を自ら見えないようにする。こうしてあなたの周りには、善意だけがあることになり、苦しいのは自分自身が弱いからだ、と思ひ込む。

ハラスメントを実現するメッセージは、最低限二つの命令からなる。一つ目は次の形式のどちらかになっている。

「これをする、おまえを罰する」

「これをしないと、おまえを罰する」

これに対して、二つ目の命令は普通、言語以外の方法で伝達されるが、無理に言葉にすると、

「これは罰ではないのだよ」

「わたしがおまえを罰するような意地悪な人間だと思っているんじゃないだろうね」

「これをお前に許さないのは、お前を愛するからこそだ」

などなど、といったものになる。

具体例を挙げよう。たとえばここに親と子がいるとしよう。一日中子供と付き合い、夜も遅くなつて、親が子供にうんざりしている。このとき親が、「お前は疲れているんだから、もう寝なさい」と言うとする。このような子供に対する発言は、よくあることで、何気ないものに見えるが、実のところ、危険な意味を含んでいる。なぜなら、言葉そのものは、「私はおまえを愛しているから、その体を気遣っている」ということを示しているが、同時に、「おまえにはもううんざりだ。うせろ」という本当は抱えている感情を、否定する意図が含まれているからである。つまり、「わたしがおまえを厄介者扱いするような、そんな意地悪な人間だと思っているんじゃないだろうね」という二つ目の命令がこっそり与えられているのだ。

針は危険ではあるが役に立つ。しかし、真綿に包まれた針は、恐ろしく危険なばかりであって、役には立たない。この真綿に包まれた針を受け取った子供はどう反応するだろうか。もしも子供が、「針」を正しく認識したならば、「親が自分を愛していない上に、自分を騙そうとしている」ということを認めねばならない。これは小さな子供にとって、とても恐ろしいことであり、とうてい受け入れがたい。そこで子供は針の入った真綿を、無害な真綿だと思い込むことにする。針がチクチクしても、その痛みは感じないようにして。

子供は、親の欺瞞を認めるかわりに、本当は疲れを感じていないのに、自分が疲れていることを受け入れる。疲れを感じていない、という自分の感覚が間違っているのであり、親の言うように、本当は疲れているはずだ、そういえばなんだか体がだるい、⁽¹⁾と思ひ込む。このとき子供は、親の欺瞞に加担して、自分自身を騙している。生き延びるために子供は、他者からのメッセージのみならず、自分自身の内的メッセージをも誤って識別するように仕向けられることになる。生き物にとって、自分自身の感覚こそは、自分の世界を生き抜くための必要不可欠の羅針盤だというのに。この羅針盤を自ら破壊した子供は、鉛色の空の下の荒海を、⁽¹⁾ヒョウリユウし始めることになる。

子供は愛される権利がある。しかし、親が誰にも愛された経験がなければ、自分の子供ですら愛することはできない。愛される権利を奪われる子供は不幸ではあるが、それでも、親がその愛情の欠如を露呈してくれるならまだましである。先ほどの場合で言うなら、「今日は十分おまえと付き合った。こっちはもうクタクタだ。とつと寝てくれ」と言うなら、針はあるが真綿には包まれていない。「お前を愛していない」というメッセージと、「愛されていない」という感覚が矛盾していないなら、子供は自分の感覚をそのまま信じていることができる。子供は正しく、親を憎むことができる。親が自分に与えているものが愛ではない、と理解できるなら、誰か自分を本当に愛してくれる人と出会うことができれば、それが愛であることが、わかるだろう。

親に愛されない子供は、不幸である。しかしそれ以上に不幸なのは、親が子供を愛せないことに罪悪感を覚え、自分が子供を愛していると思ひ込もうとする場合である。このとき、子供は真に悲劇的な情況に置かれる。⁽²⁾親が自分に対して、愛情に満ち溢れたように見える行為を熱心に行っているのを目撃しつつ、親の愛情を感じないとき、子供は、自分の感覚への信頼を失う。

「お前は疲れているんだから、もう寝なさい」と言われた子供は、親の愛情の欠如を正しく認識し、愛情を示すはずのメッセージが欺瞞であることを正しく識別すると、罰せられる。

逆に、親の愛しているフリを本物の愛情として受け取ったとしても、事態は解決しない。自分は愛されているんだと自分に言い聞かせて、親に愛を求めて近づくと、親の拒絶にあうからである。子供が、自分が愛されていると信じて、心を開いて親に近づいていくとどうなるか。子供を愛せない親は、自分の心が子供の愛に反応して正しく作動していないことをまざまざと認識させられる。親は、この認識が恐ろしく、それが露呈しない段階で、子供の接近をはばむことになる。そういう親は、子供が近づいてくると、「ほら、歯を磨きなさい」と言って洗面所に連れて行く、といったはぐらかしをしてしまう。もちろん、この行為は無意識である。無意識だからこそ、子供に与える衝撃は大きい。しかしはぐらかしたままでは、無意識のうちに罪悪感を覚えるので、親は気持ちが変わる。それゆえ、子供が心を閉ざして、ちっとも甘えていないときに限って、子供ににじり寄り、無理やり抱き寄せて、嫌がる子供の頬にキスをしたりする。そうやって自分は子供を愛しているのだ、良い親なんだ、と自分に言い聞かせるのである。これもまた、無意識に行われる。このように、子供は親のメッセージに間違ったラベル付けをすることで罰せられるばかりではなく、正しくラベル付けすることも罰せられる。これがハラスメントである。

ハラスメントから真に逃れる方法は、親の押し付けている矛盾に満ちた自分の情況についてコメントすることである。しかし、そのようなコメントは親の憤激を引き起こして更なる罰を受ける。親は、そんなのは曲解だと激しく言いつのり、子供のコメントを圧倒する。「それって、大人の都合なんじゃない？」こんなことを言えるのは、クレヨンしんちゃんくらいである。クレヨンしんちゃんが圧倒的人気を誇っているのは、この事情を世間の人々が暗黙のうちに理解しているからに違いない。脱出不能のハラスメント状況を、一撃で打ち破る彼は、まぎれもなくスーパー・ヒーローである。

クレヨンしんちゃんならざる普通の子供が、こうしたハラスメント情況に常時置かれていとうなるであろうか。子供にとって可能な合理的対応は、世界を解釈するためのシステムを、自ら破壊して混乱に陥ることである。そうすると、世界が不条理に満ちているように見え、いつも不安を感じなければならなくなるが、その代償として親の欺瞞的なストーリーを守ることが

できる。そして子供は親の「愛」を買い取ることができる。もちろんこの「愛」は、まがい物に過ぎない。こうして子供の空は鉛色の雲に覆われることになる。世界の解釈システムを自ら混乱させる結果、時には精神疾患と認識される症状を引き起こすこともある。また、場合によれば、自分自身が他者をハラスメントにかけると成長することもある。人生を正しく生きるためには、他者のものであれ自分の内部のものであれ、メッセージの種類分けを正確に行う能力が不可欠であるが、ハラスメント情況はその発揮を徹底的にソカイする。

さて、⁽⁴⁾精神疾患として認識される状態以外にも、「正常」という危険な状態がある。ドイツ出身の精神分析学者であるアルノ・グリューンは「正常」もまた統合失調症と同等の病であると明確に主張した。

アルノ・グリューンの思想の根幹は「自分に対する裏切り」という概念である。人間は、自分の感覚に従って判断し行動するという、あたりまえの能力を持って生まれてくる。この能力はメッセージへのラベル付けの能力に相当する。グレゴリー・ベイトソンはこの能力が、主として学習によって形成されるものと考えるが、グリューンは、生まれた直後の赤ん坊が、すでにこの能力を豊かに備えていると看做す。

たとえば、身体に特段の問題がないのに、繰り返し⁽⁵⁾キトク状態になり突然死の⁽⁶⁾チヨウコウを見せたあるフランスの赤ん坊の臨床例がある。この赤ん坊にありとあらゆる検査がなされたが、原因は全く不明であり、最後に精神科医のところに運び込まれた。その精神科医が家庭の情況をつぶさに聞いたところ、母親が欲していたのは女の子だったのに、生まれてきたのは男の子だった、などの理由により子供を受け入れることができておらず、また両親の関係がうまくいっていない、といった家庭の問題のあることがわかった。そこで精神科医は、両親と赤ん坊を診察室に呼んで、赤ん坊に対してカウンセリングを行い、母親の愛情が欠如していること、両親がうまくいっていないことを、あからさまに語って聞かせた。この結果、赤ん坊の症状は急速に消滅していった。この赤ん坊は言語を理解できなくとも、メッセージの意味を深く理解できたのである。

赤ん坊がどのように世界を捉えているかについての研究は、近年、急速に進展している。その結果、人間が白紙の状態で生まれてくる、というかつての信念は完全に否定された。赤ん坊は、独特の高度な世界の解釈システムを持って生まれてきて、それ

を成長にしたがって部分的に崩しては組みなおす、という形でより複雑なシステムを構成していくと考えられるようになっていく。このように子供は、本来のあるがままの豊かな人格をもって生まれてくる。親が子供をあるがままに受けとめ、愛することができるなら、この本来の自分に適合する形で人格が形成され、メッセージに対する深い識別能力を育てることができる。

ところが、親が子供の「ためを思い」、野心を持たせ、競争に勝てる、社会に従順な人間に育てたいと考えたと、本来の自分を捨てさせることになる。そのかわりに見せかけだけの「正常」な行為を産出する装置が組み込まれ、それが「自分」を構成するようになる。⁽⁷⁾ こうして本来の自分は「自分のなかの他人」となってしまう。このような情況に置かれた子供は、本来の自分のあり方を認めてくれない親の目で、自分自身を否定的に見るようになる。そして「親が愛してくれないのは自分が悪いからだ。自分のせいだ、親は良い人たちなんだから」と自分に言い聞かせる。子供は、自分が本当に受けとめた感覚を否定して、親の求める虚像を演じていけば、親に愛してもらえると理解する。この転換過程がグリユーンの言う「自分に対する裏切り」である。

この自分に対する裏切りの過程は、ハラスメントを受けた子供の自己欺瞞（より正確には、親の欺瞞への加担）の形成と同じである。このことは、親が「正常さ」という外的なメッセージを規範として受け入れており、それを子供に押し付けるといふありふれた「しつけ」の過程そのものが、ハラスメントを生み出していることを意味する。その結果、「正常」になる子供と精神疾患になる子供に⁽⁹⁾ プンキするが、それは本来の自分をどのように隠蔽して情況に対応するかの選択の違いに過ぎない。この意味では「正常」も病んでいることには変わりはない。

コミュニケーションというものはそもそも、自己満足では成立しない。典型的な例として、言語を考えてみればよい。自分の気持ちを百パーセント正しく表現できる音声の独自の組み合わせを開発したとしたら、それは他人には通じない。他人に通じさせるためには、自分にとつては外部にある言語の運用能力を身に付けなければならない。このとき、どうしても自らの魂にとつては外的であるものを、自分自身として組み込む、という過程が必要になる。コミュニケーションがハラスメントの要素なしに成立しない、というのはこのことである。

人間は外界のメッセージを解釈する高い能力を持つがゆえに社会を構成しているのであるが、この社会を作り出す能力は、本

来の自分ならざるものを自分のなかに取り込み、自分自身の一部だと思いつく能力として、他人によって悪用されうる。これは常に、自分自身の感覚を否定し、外的なメッセージの方が正しい、と思いつくことに結びつきうる。これがハラスメントの糸口を与える。それゆえ、コミュニケーションはハラスメントの可能性を常にはらんでいる。

(安富歩・本條晴一郎『ハラスメントは連鎖する——「しつけ」「教育」という呪縛』による)

注 アルノ・グリユーン……ドイツ出身の精神科医・精神分析家(一九二三～二〇一五)。

グレゴリー・ベイトソン……イギリス出身の人類学者・思想家(一九〇四～一九八〇)。

〔問一〕 傍線(1)(3)(5)(6)(9)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(2)「親が自分に対して、愛情に満ち溢れたように見える行為を熱心に行っているのを目撃しつつ、親の愛情を感じないとき、子供は、自分の感覚への信頼を失う」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「お前は疲れているんだから、もう寝なさい」という親の言葉が愛情に満ち溢れているように聞こえると、子供は親の愛情を感じなくても、その言葉に説得されて、疲れを感じていないにもかかわらず、親の言うように、本当は疲れているはずだ、そういえばなんだか体がだるい、と思うようになるから。

B 子供は親が自分を愛していないと感じているのに、愛情に満ち溢れた親の姿を目の当たりにすると、どちらを信じてよいのか分からなくなって混乱してしまい、親の愛の欠如を指し示す自分の感覚を否定して、親が自分を愛していると思いつまむようになるから。

C 親が子供に対して示す愛情に満ち溢れた行為は、子供を愛せないことに対する罪悪感に裏打ちされたものなので、子供は自分の感覚に従って親の愛情を感じられなくても、親の罪悪感の打ち消しに加担することで、次第に親が自分を愛してくれていると感じ始めてしまうから。

D 親が自分を愛していないのに、愛しているかのような素振りをするのを見た子供は、親が自分を愛していない上に騙そうとさえしていると感じても、それを認めるのは恐ろしく、また耐えがたいことなので、見せかけの愛情を示す親の素振りの方を信じようとして、自分が本当に感じたことを否定するようになるから。

E 親は子供を愛することができないという罪悪感を懸命に否定するあまり、愛情に満ち溢れたように見える行為を熱心に行うので、子供はその熱心に目を奪われて、それが見せかけにすぎないと感じるものがなくなり、見せかけの愛を本当の愛と思うようになってしまうから。

〔問三〕 傍線(4)「精神疾患として認識される状態以外にも、「正常」という危険な状態がある」とあるが、ここで言われている「正常」とはどのような状態なのか。「表面的」、「生得」、「判断」、「行動」という語句をすべて用いて、五十字以内で答えなさい。(句読点、かつこ等の記述記号も字数に数える)

〔問四〕 傍線(7)「こうして本来の自分は「自分のなかの他人」となってしまふ」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 親から押し付けられた理想や規範に自分の感覚を合わせようとするうちに、本来の自分はその内実を変えてゆき、しまいには本来の自分とは似ても似つかない全く別の存在になってしまふということ。

B 親が子供の将来のためだと言って自分の理想を押し付けようとしたり社会的な規範に従うように仕向けたりすると、いつの間にか子供の中では本来の自分が捨て去られ、代わりに自分の中に他人が居据わるようになってしまふということ。

C 本来の自分の在り方を認めてくれない親の目を通して自分自身を見ることによって、本来の自分は親の求める虚像を演ずるだけの他人のような存在になってしまうということ。

D 親の理想や規範に適った、見せかけだけの「正常」な行為を産出するための装置が組み込まれ、それが「自分」を構成するようになると、本来の自分はその装置によって消し去られてしまふということ。

E 親から押し付けられた理想や規範を自分自身のものだと思ひ込んでしまふために、そうした理想や規範とは異なる方向を示す自分本来の感覚を自分自身の感覚として受け入れられなくなってしまうということ。

〔問五〕 傍線(8)「親が「正常さ」という外的なメッセージを規範として受け入れており、それを子供に押し付けるというありふれた「しつけ」の過程そのものが、ハラスメントを生み出している」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 世間一般で言われる「正常さ」はあくまでも外から押し付けられる外的なメッセージであるため、子供にとっては本来の自分を否定するものであり、決して自ら進んで受け入れるようなものではないので、親という立場を利用して子供にそのようなものを規範として押し付けるなら、それは必然的に本人の意に反して行われる嫌がらせとなるから。

B 「しつけ」とは、子供を愛しているからこそ罰で脅してまで社会の規範を身に付けさせようとする事なので、「これをすれば罰する」もしくは「これをしなければ罰する」という命令に加えて、「お前のためなのだ」あるいは「お前を愛しているからだ」といったメッセージを含んでおり、この点でハラスメントを実現するメッセージそのものであるから。

C 親が「正常さ」という外的なメッセージを規範として受け入れておくと、その規範に合わない子供をそのまま受け入れることができず、「子供のため」と称して子供に「正常さ」を押し付けることになり、結果として子供は、親に愛されないのは自分が悪いからだと自己を否定して、親の求める「正常さ」の方が正しいと思うようになるから。

D 「しつけ」の過程において子供は、「正常さ」という外的なメッセージを規範として受け入れるために、自分自身の感覚を否定し、外的なメッセージの方が正しいと思ひ込むようになるが、そのようにして育てられた子供は、ハラスメントを受けた子供と同じように、大人になると他者をハラスメントにかける達人になってしまうから。

E 「正常さ」という外的なメッセージに基づいて子供を見る親は、ありのままの子供を否定的にしか見ないので、子供を愛することができず、その結果、自分が子供を愛せないのは子供が悪いからだと思ひ込み、ありのままの子供の自己を否定して、「正常さ」を規範として強要することになるから。

〔問六〕 次の文ア、オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 「お前は疲れているのだから、もう寝なさい」という言い方は、ハラスメントを実現するメッセージになりかねないから、本当に子供の体を気遣って早く寝るように促す場合には、別の言い方をした方がよい。

イ どうしても子供を愛することができない親は、せめて子供が自分の感覚を否定したり信じられなくなったりしないように、愛している振りなどせずに、愛していないということを子供にはつきりと示してやった方がよい。

ウ クレヨンしんちゃんが圧倒的人気を誇っているのは、子供がハラスメントから逃れるには親の押し付けている矛盾に満ちた自分の状況についてコメントすればよいという、誰にでも可能な解決策を子供たちに示しているからである。

エ 親の価値観に沿うように努めて自分の感覚に背いたとしても、世間的には「正常」として生きていくことができるので、ハラスメントを受けた場合とは異なり、精神疾患と認識される症状が引き起こされることはない。

オ コミュニケーションそれ自身がハラスメントだというわけではないが、コミュニケーションは、言語のように魂にとって外的なものを自分自身として組み込むことを前提としている以上、常にハラスメントに転じかねない危険がある。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

私は国会図書館や外務省外交史料館、防衛庁防衛研究所、日本各地の大学図書館、インド国立文書館、インド各地の図書館・書店などを巡り、R・B・ボースが書いた論考や彼に関する史資料を懸命にかき集めた。そして、それらのコピーを自宅に持ち帰り、闇に包まれた彼の思想と行動を解き明かす作業に没頭した。

各地で収集した書簡類や外交文書、彼の書いた論考の頁^{ペー}をめくる度に、胸が熱くなった。また、徐々に彼の生涯の空白部分が埋まっていくことへの喜びが湧き上がってきた。

しかし、その一方で、⁽¹⁾私の苦悩は深まるばかりだった。

R・B・ボースの提示する思想には、共鳴する部分が多かった。彼のインド独立に賭ける並々ならぬ情熱にも激しく心を動かされた。その人間性にも魅了された。しかし、彼が最終的に日本の膨張主義を看過し、その軍事力を利用してインド独立を成し遂げようとした点に、どうしても引っかけをおぼえた。日本に亡命し帰化した彼には、そのような道しか選択の余地が残されていないなかったのだろうかという問いが、私の中で何度も駆け巡った。

私は、R・B・ボースの書いた文章に向かって、そのことを問いかけ続けた。

R・B・ボースは、一九二〇年代には日本の支那保全論者を厳しく批判し、日本政府や玄洋社の「支那通」たちに対して厳しい見解を示した。また、日本の朝鮮統治に対しても、立場上、公の場では明言することができなかったが、常に強い不満を抱いていた。インドの独立を目指す彼にとって、帝国主義的傾向を強める日本は、「⁽²⁾」であった。しかし、一九三〇年代に入ると満州事変を境に、R・B・ボースは日本の中国政策批判を完全にやめた。そして、日本によるアジアの解放というイデオロギーに、インド独立のための戦略的観点から同調して行った。

一方、彼はインドの宗教哲学者オーロピンド・ゴシユの思想に大きな影響を受けており、究極的には国民国家体制を超えた世界のあり方を志向していた。そして、それを実現するため、東洋精神の発露としてのアジア主義を唱えた。R・B・ボースに

とって「アジア」とは単なる地理的空間ではなく、(3)であり、個々人の宗教的覚醒を伴う存在論そのものであった。彼は、物質主義に覆われた近代社会を打破し、再び世界を多一論的なアジアの精神主義によって包みこむ必要があると主張し続けた。しかし、そのような理想は、「大東亜」戦争のイデオロギーに吸収され、それを補完する役割を果たした。結果的に、大日本帝国による植民地支配や「大東亜」戦争は、多くの人命を奪い、アジア諸国の人々の尊厳を深く傷つけた。

R・B・ボースは、イギリスの植民地支配からインドを独立させアジア主義の理想を実現させるためには、日本という帝国主義国家の軍事力に依存せざるを得ないという逆説を主体的に引き受けた。「ハーディング爆殺未遂事件」などのテロ事件を主導してきたR・B・ボースは、目的と手段が乖離する（かひり）というアイロニーを、避けて通ることのできない宿命と認識していた。彼はテロや戦争の限界を十分に理解した上で、なおかつそのような手段を用いなければ植民地支配を打破することができないという信念をもっていた。

そして、この問題はR・B・ボースの生涯に限定された課題などではなかった。これは近代日本のアジア主義者や「近代の超克」論者がぶつかった大きな問題であり、広く近代アジアにおける思想家・活動家たちにも共通する難問であった。「近代を超克し東洋精神を敷衍（ふんげん）させるためには、近代的手法を用いて世界を席卷する西洋的近代を打破しなければならない」というアポリアこそが、二〇世紀前半のアジアの思想家たちにとっての最大の課題であり、苦悩だったのである。

近代日本には「近代の超克」的論点から多一論的宗教観の重要性を説き、アジア主義の文明論的意義を説く人達が存在した。しかし、一方でそのような人たちの思想が、日本の膨張主義をサポートし、多くの悲劇を生み出したことも事実である。彼らが戦争というきわめて近代主義的な手法によってアジアを侵略するプロセスを、「東亜共同体」の形成や「近代の超克」の一段階として追認していった事実を目をつぶることはできない。

ただし、その論理が侵略戦争を補完する役割を果たしたからといって、すべてを否定してしまうことには大きな問題がある。かつて竹内好は、「『近代の超克』は事件としては過ぎ去っている」が、「思想としては過ぎ去っていない」と断言し、課題そのものを放棄してはならないと説いた。そして、「西洋的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために、西洋をもう一度東

洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻き返し、あるいは価値の上の巻き返しによって普遍性を作り出す」ことこそが、現代世界におけるアジア主義的課題であるとされた。さらに、その思想的根拠としての「アジア」は、「実体としてある」のではなく、主体形成の過程としてありえると論じた上で、「方法としてのアジア」を追求すべきことを訴えた。

この竹内の問いは、「アジアという問題」が未だ解決されず、思想課題としては今なお生命力を失っていないということを鋭く投げかけている。

(中島岳志『中村屋のボース』による)

注 R・B・ボース……インドの独立運動家(一八八六―一九四五)。

多一論的宗教観……相対世界における宗教の多様性と超越的真理の唯一性を認識する宗教観。

アポリア……解決の糸口を見出せない難問。

〔問一〕 傍線(1)「私の苦悩は深まるばかりだった」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A イギリス帝国主義からのインド独立を目指していたボースが、帝国主義化する日本には同調し、その軍事力を利用して、先の見えない闇の中を歩くような思いにとらわれたから。

B 史資料を読み込むことによって、ボースの生涯に関する多くの空白を埋めることができたが、逆に新たな疑問も生まれ、先の見えない闇の中を歩くような思いにとらわれたから。

C ボースが日本に亡命し帰化することによって、日本の膨張主義を看過せざるをえない立場へと追い込まれていったことに、日本人としていたたまれない気持ちになったから。

D 多くの史資料にあたりボースの生涯が明らかになるにつれ、彼の思想や行動に対する疑問も湧き上がり、それまで抱いていたボースへの信頼や尊敬の念がゆらいだから。

E 日本の中国政策に批判的だったボースが、のちに批判の矛先をゆるめたことに、東洋的な寛容の精神を見る一方、独立運動家としての言動の一貫性に疑問を覚えたから。

〔問二〕 空欄(2)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A インド独立のための戦略的同盟国

B 近代化を成し遂げたアジア最初の国

C インドを虎視眈々と狙うインドの敵

D 西洋近代主義に対抗しうるアジアの理想

E インドを苦しめるイギリスと同じ穴の貉

〔問三〕 空欄(3)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 国民国家を建設するための政治的根拠
- B 理想宗教を追求するための哲学的根拠
- C 西洋近代を超越するための思想的根拠
- D 独立主権を回復するための法律的根拠
- E 民族意識を確立するための歴史的根拠

〔問四〕 傍線(4)「そのような理想は、「大東亜」戦争のイデオロギーに吸収され、それを補完する役割を果たした」とあるが、

その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A アジアに必要なのはアジア人自身の精神的覚醒であるというR・B・ボースの思想は、アジアにおける東洋精神の回復という名の下に膨張主義へと向かう動きと結びつき、それを補強した。
- B 東洋精神こそが西洋の物質文明を超えた世界を作るというR・B・ボースの思想は、西洋の植民地支配からの解放という名の下に膨張主義へと向かう動きと結びつき、それを補強した。
- C 西洋近代と東洋精神の融合によって理想の文明が生まれるというR・B・ボースの思想は、西洋・東洋という概念を超越した世界の構築という名の下に膨張主義へと向かう動きと結びつき、それを補強した。
- D 近代国家に求められるのは物質と心の統合を可能にする東洋精神であるというR・B・ボースの思想は、東洋精神の世界普及という名の下に膨張主義へと向かう動きと結びつき、それを補強した。
- E 多一論的宗教観にもとづく東洋精神が宗教の異なる国々を結びつけるというR・B・ボースの思想は、既成の宗教を超えた倫理の確立という名の下に膨張主義へと向かう動きと結びつき、それを補強した。

〔問五〕 本文の趣旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A R・B・ポースは、日本に亡命したことを運命として受け止め、日本と協力してインドの独立を目指すことを自らの使命と考えたが、一方でインドの宗教哲学者の思想にも大きな影響を受けており、最終的には日本とインドを中心としたアジアのあり方を志向していた。

B R・B・ポースの思想は、インドの哲学や宗教にもとづく素朴な理想主義から出発しているが、近代日本のアジア主義者たちの思想に触れたことによってしだいに日本の宗教観や政治思想を受け入れるようになり、結果的には日本の帝國主義的イデオロギーに加担した。

C R・B・ポースは、理想社会の実現という目的のためにはテロや戦争という手段を用いることもやむを得ないという考えをもっていたが、そのような考えは現代社会の一部にもなお存在することを思えば、彼が抱えていた課題は未だ解決されていない現代的課題でもある。

D R・B・ポースや近代日本のアジア主義者ひいては二〇世紀前半のアジアの思想家たちに共通する大きな課題は、西洋という「近代」を超越することにあつたが、それは同時に、「近代」を超越するためには近代的手段を用いてはならないという難問でもあつた。

E R・B・ポースおよび近代日本のアジア主義者たちの思想が帝國主義的イデオロギーと結びつき多くの悲劇を招いたことは厳しく批判されなければならないが、東洋精神をもって理想を実現しようとした彼らの試みの中には、今なお検討されるべき課題が存在する。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

今は昔、民部卿藤原忠文といふ人ありけり。この人宇治に住みければ、宇治の民部卿となむ世の人いひける。⁽¹⁾鷹をぞ極めて好みけるに、その時に重明の親王といふ人おはしけり。その官もまた鷹を極めて好みたまひければ、「忠文の民部卿のもとによりき鷹あまたあり」と聞きて、それを乞はむと思ひて、忠文の宇治に居たりける家におはしにけり。忠文驚き騒ぎていそぎ出で会ひて、「こは何事によりて思ひかけず渡りたまへるぞ」と問ひければ、親王「鷹あまた持ちたまへるよしを聞きて、それ一つたまはらむと思ひて参りたるなり」とのたまひければ、忠文「人などを以て仰せたまふべき事を、かくわざと渡らせたまへれば、いかでか奉らぬやうは侍らむ」といひて、鷹を与へむとするに、鷹あまた持ちたりける中に、第一にして持ちたりける鷹は、世に並びなく賢かりける鷹にて、雉に合はするに必ず五十丈が内を過ぎずして捕りける鷹なれば、それをば惜しみて、次なりける鷹を取り出でて与へてけり。それもよき鷹にてはありけれども、かの第一の鷹には当たるべくもあらず。

しかして親王鷹を得て喜びて、自ら据ゑて京に返りたまひけるに、道に雉の野に臥したりけるを見て、親王この得たる鷹を合せたりけるに、その鷹つたなくて鳥をえ取らざりければ、親王「かくつたなき鷹を得させたりける」と腹立ちて、忠文の家に返り行きて、この鷹を返しければ、忠文鷹を得ていはく「これはよき鷹と思ひてこそ奉りつれ。しからは異鷹を奉らむ」といひて、「かくわざとおはしたるに」と思ひて、この第一の鷹を与へてけり。親王またその鷹を据ゑて返りけるに、木幡の辺にて試みむと思ひて、野に犬を入れて雉を狩らせけるに、雉の立ちたりけるに、この鷹を合はせたりければ、その鷹また鳥を取らずして飛びて雲に入りて失せにけり。⁽⁸⁾しかればその度は、親王何ものたまはずして京に返りにけり。

これを思ふに、その鷹忠文のもとには並びなく賢かりけれども、親王の手にてかくつたなくて失せにけるは、鷹も主を知りてあるなりけり。しかれば智なき鳥獸なれども、本の主を知れることかくのごとし。いはむや、心あらむ人は、故を思ひ専らに親しからむ人のためにはよかるべきなりとなむ語り伝へたるや。

注 五十文……約一五〇メートル。

〔問一〕 傍線(1)(4)(9)の解釈として、もつとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) 鷹をぞ極めて好みけるに

- | | |
|---|--------------------|
| A | 鷹で狩りをするのを非常に好んでいたが |
| B | 鷹の飼育を究めて自分の趣味としたので |
| C | 鷹を捕るのをすぐ好んでいたところに |
| D | 鷹だけをこのほか好んで食べたのだが |

(4) 参りたるなり

- | | |
|---|--------------|
| A | ご挨拶にうかがったらしい |
| B | 鷹を差し上げに参りました |
| C | あなたに奉仕いたしました |
| D | ここに参上しているのだ |

(9) 心あらむ人

- | | |
|---|------------|
| A | 情け深いと思われる人 |
| B | 風情がありそうな人 |
| C | 道理をわかまえる人 |
| D | 情趣を解するような人 |

〔問二〕 傍線(2)(3)(6)の文法的説明としてもつとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

A 格助詞

B 副助詞

C 係助詞

D 接続助詞

E 終助詞

〔問三〕 傍線(5)「かくわざと渡らせたまへれば、いかでか奉らぬやうは侍らむ」の口語訳として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A こんなにも目立つ様子でいらしてしまったからには、どのようにして鷹を差し上げればよろしいでしょうか。
- B このようにわざわざお越しになっているのですから、どうして鷹を差し上げないことはございませうか。
- C このように正式に申し込まれたとしても、どう考えても私が鷹を差し上げる理由はございませうか。
- D これくらいのこととしたご来訪では、どうしてあなたに大事な鷹を差し上げられるのでしょうか。
- E これほど真剣に申し上げているのですから、何とか鷹をお持ちになる気はないのでしょうか。

〔問四〕 傍線(7)「この第一の鷹を与へてけり」とあるが、忠文がそのようにした気持ちとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 親王の再度の来訪に怒りの大きさを感じたので、自分の大事な鷹で歓心を買おうとした。
- B 親王がみずから何度もいらつしやることに不快を感じ、もう来ないようにしようと考えた。
- C 親王が鷹狩りにかける熱意に感動して、あまりよくない鷹を差し上げるのは失礼だと思った。
- D 親王によくない鷹を差し上げたことを見破られたので、最良の鷹を用意するしかなかった。
- E 親王の鷹を見る目に疑問を持ちつつも、親王みずから来訪した熱意に応えようと思った。

〔問五〕 傍線(8)「失せにけり」の理由として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 鷹には長く飼ってくれた飼い主がわかるので、忠文以外の人の指示には従わないから。
- B 鷹には飼い主との相性があるので、忠文にはよい鷹でも親王とは氣質が合わなかったから。
- C 鷹は本来とても賢い鳥なので、親王の狩りの技量が忠文よりも低いことを見抜いていたから。
- D 鷹はもともと雉を捕ることを好まないのに、忠文の手を離れて本来の性質が自覚めたから。
- E 鷹にも心があるので、興味本位で狩りをしたがる親王の指示には従いたくなかったから。

(